Food and Agriculture Organization of the United Nations

IFAD International Fund for Agricultural Development

unicef

WFP World Food Programme

World Health Organization

2018

世界の食料安全保障と栄養の現状

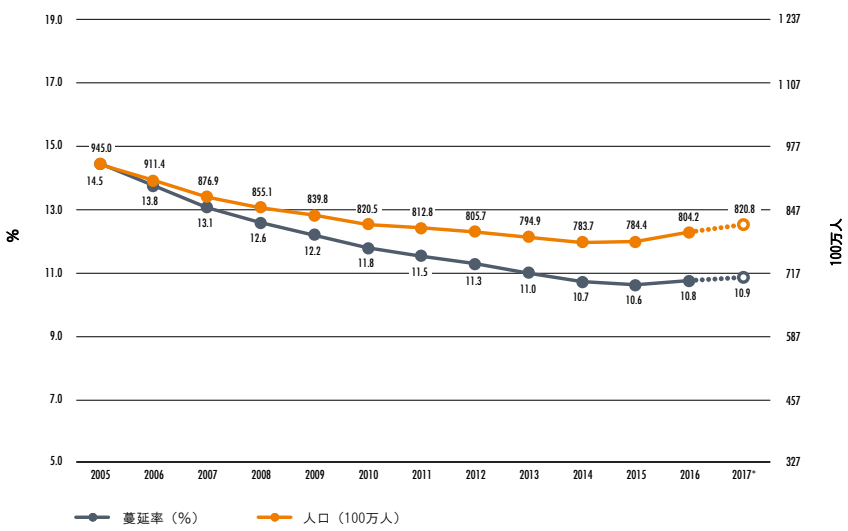
食料安全保障と栄養の確保に向けた気候レジリエンスの構築

世界の飢餓人口は増加し続けている。現在得られるデータによると、飢餓人口はここ3年間増え続けており、いまやほぼ10年前の水準に後退している。栄養不足―― つまり、慢性的に食料摂取不足の状態にある人の絶対数は、2016年のおよそ8億400万人から、2017年には8億2,100万人近くまで増加したと推定されている。南米や、アフリカのほとんどの地域で状況が悪化しており、さらに最近までアジアで特徴的に見られた栄養不足の改善傾向も著しく減速しているようだ。

多くの国でさまざまな形態の栄養不良がはっきりと見て取れる。食料、特に健康的な食料へのアクセスが不十分であることは、低栄養だけでなく、過体重や肥満の一因にもなる。食料の入手困難は、低出生体重や子どもの発育阻害、妊娠可能年齢にある女性の貧血のリスクを高めるうえ、特に高中所得国や高所得国では、学齢期の女子の過体重や女性の肥満にも関係する。食料不安を抱える家庭で過体重や肥満のリスクが高くなるのは、栄養価の高い食品ほど高価であることや、食料不安からくる生活のストレス、食料の制約に対する生理的適応の結果として説明がつく。

加えて、母子が食料を十分に得られないと、子どもが胎児期や初期成長期に「代謝刷り込み（インプリンティング）」を受ける恐れがある。こうした子どもは将来、肥満や食に関する非感染性疾患に罹患するリスクが高まる。 »

世界の栄養不足人口は2014年以来増加傾向にあり、2017年には推定で8億2,100万人に達した



*点線と白丸で示した部分は予測値。
出典: FAO.

主要メッセージ

➔ 長らく減少傾向にあった世界の飢餓人口が増加に転じている。2017年の栄養不足人口は、世界のおよそ9人に1人に当たる8億2,100万人に増加したと推定されている。

➔ 子どもの発育阻害は、引き続きある程度の改善が見られるものの、依然として容認しがたいほど高い水準にある。2017年には、5歳未満児の22%超に当たる1億5,100万人近くが発育阻害を呈していた。

➔ 消耗症を呈する5歳未満児は依然として5,000万人以上にのぼっており、こうした子どもは罹病や死亡のリスクも高い。その一方で、3,800万人以上の5歳未満児が過体重である。

➔ 成人の肥満は悪化しており、世界の成人のおよそ8人に1人に相当する6億7,200万人余りが肥満である。多くの国で低栄養が過体重や肥満と併存している。

➔ 食料不安は低栄養だけでなく、過体重や肥満の一因にもなる。食料不安を抱える家庭で過体重や肥満のリスクが高くなるのは、栄養価の高い食品ほど高価であることや、食料不安からくる生活のストレス、食料の制約に対する生理的適応の結果として説明がつく。

➔ 食料へのアクセスが不十分であると、出生時の低体重や子どもの発育阻害のリスクが高くなる。こうした子どもは、その後の人生で過体重や肥満になるリスクも高くなる。

➔ 極端な気象現象がより複雑化し、頻発し、激甚化することによって、飢餓や栄養不良の改善が損なわれ、取り組みが後退しかねない恐れがでてきた。

➔ 紛争に加え、気候変動性と極端な気象現象は最近の飢餓人口増加の重大な背景の一端であり、深刻な食料危機の主要因のひとつである。気候変動の累積的影響は、食料安全保障の4要素——供給、アクセス、利用、安定性——のすべてを損ねている。

➔ 栄養は気候変動の影響をきわめて受けやすく、その結果、たとえば、生産・消費される食料の栄養の質や食事の多様性の低下、水や衛生面への影響、健康リスクや疾病のパターンへの影響、母子の健康管理や母乳育児の変化などにみられるような、深刻な負荷を被っている。

➔ 気候変動性と極端な気象現象への対抗手段として、食料システム、人々の生計、栄養のレジリエンスや適応能力の強化を図るための行動を、一段と加速・拡大する必要がある。

➔ 解決策には、パートナーシップの拡大、統合的な災害リスク削減および管理への多年度にわたる大規模な資金供与、短・中・長期的な気候変動適応プログラムの拡充が求められる。

➔ 食料不安やさまざまな形態の栄養不良の増加の兆候は、食料安全保障と栄養の確保を目指すSDGsの実現の途上に「誰一人取り残さない」ために、より一層の取り組みを急ぐ必要があることの紛れもない警告である。

» 気候変動性と極端な気象現象は、最近の飢餓人口増加の重大な背景の一端であり、深刻な食料危機の主要因のひとつである。気候変動性と極端な気象現象の深刻化は、食料安全保障の4つの要素（供給、アクセス、利用、安定性）のすべてに負の影響を及ぼすうえ、育児や食事、保健医療サービス、環境衛生に関わるその他の栄養不良の根本的要因をさらに強める。特に貧困層の生計や生計資産が気候変動性と極端な気象現象の影響をより受けやすくなっていることが、今日食料不安や栄養不良のリスクをひときわ大きくしている。

『世界の食料安全保障と栄養の現状2018年報告』は、気候変動性と極端な気象現象の増大に直面している今こそ、レジリエンスや適応能力の強化に向けた行動を加速・拡大していくために、緊急のアピールを呼びかけるものである。

報告書の第1部は、持続可能な開発目標（SDGs）ターゲット2.1と2.2の進捗状況のモニタリングに焦点を置き、飢餓、食料不安、あらゆる形態の栄養不良における最新の動向を検証する。また、本年の報告書では、5歳未満児の消耗症の指標について掘り下げて考察する。

第2部では、気候変動性と極端な気象現象が、さまざまな経路を通じて、食料安全保障や栄養分野の前進を妨げている実態を詳細に検証する。こうした分析を踏まえたうえで、結論として、2030年までに飢餓とあらゆる形態の栄養不良の解消（SDGターゲット2.1と2.2）や、気候変動とその影響に対処するための行動（SDG 13）を含めたその他の関連SDGsを達成するために、気候変動性と極端な気象現象がもたらす重大な課題をいかに克服していくべきかについて、手引きを提供する。■

CA1355JA/1/10.18

全文はここからダウンロード（英文）

2018年9月
ISBN 978-92-5-130571-3
200 pp.
210 × 297 mm

アラビア語版、中国語版、フランス語版、ロシア語版、スペイン語版も発行

テーマ区分：
食料安全保障
栄養
レジリエンスの構築
紛争
気候変動

『世界の食料安全保障と栄養の現状』は、FAOとIFAD、UNICEF、WFP、WHOが共同で作成する旗艦報告書である。本書は、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の下での飢餓の解消、食料安全保障の実現および栄養の改善に向けた取り組みの進捗状況を報告するとともに、こうした目標を達成するための主要課題についての詳細な分析を提供する。政策決定者、国際機関、学術機関および一般市民を含む幅広い読者を対象としている。

翻訳：国際連合食糧農業機関（FAO）駐日連絡事務所